

## 東南アジアに 二世リーダーがなぜ多いのか

2024 年夏、タイの政治が揺れた。

2023 年 5 月の総選挙で第 1 党になった前進党に憲法裁判所から解党命令が出た。不敬罪がその理由とされている。次いで、セター首相が失職した。理由は前科がある者を閣僚としたということであった。司法介入によってタイの政局は混乱に陥るかと思われたが、タクシン元首相の次女であるベートンタン氏が首相に任命されることで事態は収束した。

タクシン元首相の次女が首相に就任したことは、長年対立していた反タクシン派の保守勢力と親タクシン派であるタイ貢献党が手を結んだことを示唆する。その狙いは、前進党など若者を支持母体とする新しい勢力に対抗するためだという。保守派とタイ貢献党との協力は「敵の敵は味方」というところか。それよりも、37 歳という若さのベートンタン新首相が同世代の支持を取り込むのに適任と判断されたためだろうか。ベートンタン新首相の政治手腕は未知数だが、具体的な政策は父親であるタクシン氏が描くというのが大方の見方である。

それにしても東南アジアのリーダーには二世が多い。シンガポールのリー親子、フィリピンのマルコス親子、カンボジアのフンセン親子、インドネシアではブラボウ氏が新しい大統領となり、ジョコ前大統領

の長男が副大統領になる。みな一応、選挙という手続きを経て政権についている。それでかつ人気がある。



時事ネタのパロディで知られるコントグループ「ニュースペーパー」には、二世議員を皮肉る有名なセリフがある。「どこの馬の骨かわからないよりも、どこの馬の骨かわかっているほうが安心だからね」。たしかに二世議員だけでなく、芸能人やスポーツ選手など有名人が議員に選ばれる理由は、そんな単純なところにあるのかもしれない。

政治に疎い私にはよくわからない。

だから、出自や前職に振り回されないように注意している。むしろ政策とその効果だけで判断しようと心がけている。中国経済を高成長に導いた鄧小平氏の「黒い猫でも、白い猫でも、ネズミを捕るのが良い猫だ」というフレーズを借りれば「どこの馬の骨でも、国民と環境を守る政策を講じる政治家が、良い馬の骨だ」というところか。

ベートンタン新首相の政策に注目したい。

(アジア研究所教授 大泉啓一郎)

### \* 研究所だより \*

第 44 回アジア研究所公開講座『アジアにおける構造的失業と外国人労働』を 6 月 29 日から 7 月 27 日にかけて全 4 回にて開催いたしました。各回講演のタイトル・登壇者は次の通りです。

第 1 回「深刻化する韓国の労働力ミスマッチ：外国人労働者の増加と若年待業の深刻化」

亜細亜大学アジア研究所 奥田聡 教授

第 2 回「デジタル・チャイナの就職難：プラットフォーム経済のリスクと保障」

東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授 澤田ゆかり氏

第 3 回「日本の高度外国人材受け入れ：アジアの就職難と人材獲得に向けて」

亜細亜大学アジア研究所 九門大士教授

第 4 回「東南アジアのインフォーマル経済を考える：タイの事例から」

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 教授 遠藤環氏

申込者は延べ 500 人を超え、各回の講演では活発な質疑応答が行われました。

今後もアジア各国の情勢についての確かつタイムリーな情報提供に努めてまいります。皆様のご意見・ご要望をお寄せください。(koza@asia-u.ac.jp)